第 2017-09 号

恵みと真理のニュース

2017 年 2 月の四次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］ 私のような愚かな者も憐れみと愛で幸せな人生になるように導いてくださった神様を賛美します

私は68歳で誰より、波乱万丈の生涯でした。私はピョンテクで農業をする典型的な田舎の豊かな家の長孫で生まれ育ちました。一年の農業と収穫を終える冬になると相変わらず偶像崇拝をして先祖の祭祀を続けて行う家でした。しかし、"昔の言葉でお金持ちが3代に続かない。" と言われるように家計が倒れて勉強を辞めて親と離れソウルに来ました。ところが、運が良かったのか早く結婚して財物を集めました。しかし、みんなから成功したと褒められる中で歳月が経つことも忘れてお金を使ってしまって結局、事業は大変になって両親はなくなり、幼い弟達をつれてあちこちを回して引っ越しました。
泣きっ面に押さえつけるとも離婚しました。多くの家族を連れて借家を転々しながら食事を抜かす中で人生無常ということを感じました。そうするうちに、耳は軽くなって、人々が良いと言われるとすぐ事業をやってみて、お酒を飲む友達と付き合って浮かれ男になって過ごしました。やらなかった事もなくて最後にはお金を全部集めて多段階事業に入れて天金を待ってました。すると、愛する家族まで一人二人、私のそばを去っていきました。
その時から様々な偶像崇拝をしました。カトリック教会で洗礼をうけて金シュハンの枢機卿の堅信式も受けて、これからすべてかよくできると確信して故郷にある最後の土地まで処分して新しい仕事を始めました。しかし、このお金も蕩尽しまいました。その後、隣の家に住むおばさんがお寺に行って先祖に祭祀を捧げると何事がよくできるとしました。それで、またあちこちでお金を大変に集めて祭祀を行ったがやはりこの事も無駄な事でした。
飲んではいけないものを飲んでしまって廃人のようになった時に、親戚の手につられてワンジュにある教会に行きました。聖徒をついてはじめて賛美をする時に讃美歌の歌詞は"世の中に真実な友達もいなくていつも寂しかった私の心を響きました。礼拝が終わって牧師が真に慰めてくださり、お酒とたばこをやめるように祈ってくださいました。これから、イエス様を信じて信仰生活をすると頼まれてコチュジャンといろんな食べ物をくださいました。ソウルで帰ってくる道にまた大きい事故の危機がありましたが、その時に考えもしなかった方法で問題が解決された奇異な事を経験しました。 しかし、まだ偶像崇拝に対する未練もあってタバコよりもっと悪い物を飲んで当時には付き合っていた妻にばれました。その後、別れることによって大きくケンカをし私はヨンインで暮らすと思いました。そのときが1997年10月でした。その日、初めて車の運転席に座って大きい声で泣きながら"神様アバ父よ。" と叫びながらお祈りしました。今までお小遣いをくれて私を守ってくれた妻に対する申し訳ない心と祝福する心を思って神様に祈って、罪を赦してくださいこれから真面目に生きる力と勇気をくださいと祈りました。たくさん泣いてすっきりしました。
事業をする時に出会った妻と付き合う時に借金を返して残った金がなくてソウルの漢江の高水敷でテントを張って3か月間暮らしました。妻の助けで今は人らしく生きてきたので、妻にとても申し訳ないし恥ずかしかったです。服を持ってくるためまた、ソウルに上がって来た私を妻はいつケンカをしたかのような穏やかな顔をしてご飯を作ってあたたくしてくれました。もう、ヨンインは行かないといった妻を説得して共にヨンインで移住しました。ヨンインでい引っ越ししてきた後、翌年IMFの状態が来ました。以前に事業を整理して降りて来て良かったです。もしそうしなかったら債権者達が借金の催促で生きられなかったです。
周りに建物もない半分地下の家を借りで妻と共に新しい人生を始めて真の天の父である神様に会うようになりまし。ヨンインに来て張魯と勧士の愛と伝道で恵みと真理教会の聖徒になりました。
教会に来てまもなく、私は以前の間違った行動によって刑務所に入りました。しかし、そこにいるのが無駄な時間ではなかったです。冷たい部屋の中で自分の人生を顧みたりまことに祈るようにする神様の摂理だったと思いです。2審の裁判の後、3審を申し込みしたがすぐ取り消しして、次の時にも大きい罪でもなかったですが、みんなが恐れたチョンソン刑務所で1年間過ごしました。妻は裁判をするお金をあちこち借りて一日も休まずに面会してきました。妻を考えると神様が私をかわいそうに思って私に天使を送ってくださったと思います。
拘置所から刑務所に移動してみたら死刑囚、無期懲役囚たちと同じ部屋でした。初めはとても怖くてこの状況が悲しくて死にたかったです。しかし、すぐ、元気を出した神様を委ねる信仰で大胆におなし部屋を使っている人々に理解してもらって神様に祈る時間を持ちました。主は平安で私を守ってくださり、この人々を伝道するように神様に祈りました。神様を信じ頼ることが出来て感謝でした。" 恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える。" 祈りが終わるときに神様の声が聞こえるようでした。そして、その夜、神様の夢をみました。私の祈りを聴いてくださり同じ部屋を使っている人々に感動を与えてくださいました。それで、前例になく収監されるやいなや部屋で一番大きなお兄さん扱いを受け、大きな困難なしに過ごすようになり、無事に家庭と社会に戻ってくることが出来ました。
神様の大きい恵みと助けを体験して熱心に信仰生活をする中で孫娘が白血病にかかり、生死の境をさまよってこれ以上、生きの見込みがないという言葉を聞いて惨憺たる状況になりました。神様の奇跡だけを望む現実で少し嘆息をしましたが、すぐ心を大胆にして希望の中で神様を仰ぎました。"わたしを呼べ。わたしはあなたに答え、あなたの知らない隠された大いなることを告げ知らせる。" （エレミヤ書33：3）という御言葉を信じて神様を仰ぎ確信をもって祈りました。当会長も祈ってくださり、金曜日祈り会でも多くの聖徒が共に孫娘の病気が治るように祈ってくださいました。神様が聞いてくださり、孫娘を治療してくださいました。当会長の牧師と祈ってくださった生徒に感謝します。神様を畏れて委ねて真面目に生きるとすると、神様は私の家庭に経済的な福も与えてくださいました。半地下の家で住んでいた私が今は主がくださった美しい家で賛美をしながらこの証を書きます。今まで五つの店舗を運営するまで、神様が道を開いてくださり、様々な形で助けてくださり道を開いてくださいました。私が過ぎ去った過去と今まで体験した神様の恵みを文書で表現できないです。神様の憐れみと愛がなかったら今日の私が存在できなかったです。神様に栄光を捧げます。日々神様の恵みと愛に感謝しながら、神様を賛美し愛しながら生きて行きます。ハレルヤ！

［信仰コラム］ なおざりにしてはならない救い

"...わたしたちは、こんなに尊い救をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ、..." （ヘブル人への手紙 2:1～4）

人がこの世で生きる間に得ることができてまた、必ず得なければならないことがあります。それは神様が人生達に与えてくださる救いです。これより価値のあることはありません。この救いは無視したりなおざりにすることができないことであります。
まず、なぜ私達が救いをなおざりにしてはならないのかを調べてみましょう。
第一、"こんなに尊い救い"であるからです。本文に"こんなに尊い救い"だと形容したのは救いに含まれている内容がおびただしいからです。全ての人は神様の前で罪人であり、人間自らでは罪を解決する方法が全くありません。しかし"救い"の中には罪の許しを得て正しくなることが含まれています。アダムの犯罪によってアダムの子孫である全ての人はサタンの僕になりサタンの子という身分に転落され、人間の努力ではこのような運命から離れることができる道がありません。しかし"救い"の中には神様の子供になることが含まれています。罪人は滅びを受けて地獄刑罰に処されるが、人間は地獄刑罰を免れることができる方法がありません。しかし"救い"の中には天国で永遠に生きることが含まれています。
第二、大した犠牲を通じてくださった救いであるからです。救いは神様が罪人を哀れんでくださり"私があなたがたの罪を許す。"というお言葉だけで与えてくださるのではありません。神様が天地をお言葉で創造なさったが、罪人を救うためには独り子をこの世にお送りなさって私達の罪を代わりに担って十字架につけられ贖いの死を死なれるようになさいました。従って、"こんなに尊い救い"だと形容したのが適当であります。
第三、救いをなおざりにする人は神様の怒りと審判を受けて滅びられて二度と救いを得る機会を得られないからです。神様が与えてくださる"こんなに尊い救い"をなおざりにすることは神様を拒否して蔑視することなので神様の審判を免れません。このような人は死と共に地獄刑罰に処されて二度と救いを得る機会を得ることができなくなります。ルカによる福音書 16 章に記録されたラザロと金持ちに関する話はこの世で生きる間に"こんなに尊い救い"をなおざりにした人は最も愚かで浅ましい人であるという事実を申し分もなく確証しています。
次は、救いをなおざりにしないように警戒して慎むべきのことに関して調べてみます。
第一、本文に"こういうわけだから、わたしたちは聞かされていることを、いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう。"と記録されています。"おし流される"ようにする原因が多くあります。一つは誤った教理を分別もなしに受け入れるからです。二つは誤った教理と教訓を受け入れて"押し流されて"いく人の心には貪欲があります。真実なキリスト人はお金や名声に対する欲求を満たすために福音を混雑にしません。三つは他の宗教を信奉する人々の機嫌をとるのを好む者達は化合と相生のためだと話しながら"おし流されて"しまいます。彼らにイエスキリスト以外には救いの道がないことを知らせるのが誠に永遠に福のある生活を共に共有する相生の行為であります。
第二、本文に"この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ、さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである。"と記録されています。救いの道は神様が定められました。聖書に記録された神様の救いの真理は加減することができません。これを加減する行為に対しては厳重な警告が与えられています。（ヨハネの黙示録 22:18、19）イエスキリストによる"こんなに尊い救い"を得ると価値観に顕著な大きい変化で生じます。この世の地位、名誉、権勢、物質等が全て限定的で一時的であり相対的な価値を持つだけだということを悟ります。その反面、神様がキリストイエスの中で与えてくださる"こんなに尊い救い"はイエスキリストを信じる者に無制限的で永遠であり、絶対的な価値があることを悟ります。誠に豊かな人、最も成功した人、本当に幸いな人は"こんなに尊い救い"を得た人であります。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

神様に使わされる人々

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

今日は旧約聖書の列王紀下 6 章と 7 章に記録された事件を詳考することで極甚な難局を打開して行く知恵を得るようにします。 イスラエル国に予言者エリサが活動した時であります。スリヤ国のベネハダデ 王が大軍を導いてイスラエルを侵攻しました。 イスラエル軍隊はサマリア城の内で身を避けた後城の門を固く閉めました。スリヤ軍隊はサマリア城を完全に囲んで食糧供給を遮断してしまうことで降参を受け出そうと待っていました。 サマリア城内の食糧事情はますます難しくなって行きました。久しくなくてサマリア城の内の食糧危機は絶望的な状態になりました。

ある日はイスラエル王が城壁に沿って歩いて行っているのに女性一人が王を向けて悲嘆の声で叫びました。 “そして王は女に尋ねた、「何事なのですか」。彼女は答えた、「この女はわたしにむかって『あなたの子をください。わたしたちは、きょうそれを食べ、あす、わたしの子を食べましょう』と言いました。それでわたしたちは、まずわたしの子を煮て食べましたが、次の日わたしが彼女にむかって『あなたの子をください。わたしたちはそれを食べましょう』と言いますと、彼女はその子を隠しました」。”
王は自分の服を裂きながら叫びました。 “そして王は言った「きょう、シャパテの子エリシャの首がその肩の上にすわっているならば、神がどんなにでもわたしを罰してくださるように」。 王は訳もなく罪のない予言者エリサを責めながら彼にすべての責任を被せようと思いました
王の命令が下がったら即時に軍人が予言者エリサを逮捕しようと駆け付けたし王もまっすぐにその後を追い掛けました。 エリサの家所で差しこんだ王はエリサを定罪し始めました。

“エリサよ、お前はエホバ神様を頼って待ちなさいと言ったの。 しかし見よすべて全城の内に糧がないので死の影が覆い被せていないか。「この災は主から出たのです。わたしはどうしてこの上、主を待たなければならないでしょうか」” あの時エリサが予言を宣布しました。
“エリシャは言った、「主の言葉を聞きなさい。主はこう仰せられる、『あすの今ごろサマリヤの門で、麦粉一セアを一シケルで売り、大麦二セアを一シケルで売るようになるであろう』” ”時にひとりの副官すなわち王がその人の手によりかかっていた者が神の人に答えて言った、「たとい主が天に窓を開かれても、そんな事がありえましょうか」。エリシャは言った、「あなたは自分の目をもってそれを見るであろう。しかしそれを食べることはなかろう」。”
そういう状況の中で“さて町の門の入口に四人のらい病人がいたが、彼らは互に言った、「われわれはどうしてここに座して死を待たねばならないのか。われわれがもし町にはいろうといえば、町には食物が尽きているから、われわれはそこで死ぬであろう。しかしここに座していても死ぬのだ。いっその事、われわれはスリヤびとの陣営へ逃げて行こう。もし彼らがわれわれを生かしておいてくれるならば、助かるが、たといわれわれを殺しても死ぬばかりだ」。” 彼らは決断を下してスリヤ軍隊がいる所を向けて歩き始めました。彼らは途中に倒れたりお互いに起こしてくれたり脇を抱えて助けて一歩ずつこれから進みました。
ところでそこで彼らはスリヤびとの陣営へ行こうと、たそがれに立ちあがったが、スリヤびとの陣営のほとりに行って見ると、そこにはだれもいなかった。 これは主がスリヤびとの軍勢に戦車の音、馬の音、大軍の音を聞かせられたので、彼らは互に「見よ、イスラエルの王がわれわれを攻めるために、ヘテびとの王たちおよびエジプトの王たちを雇ってきて、われわれを襲うのだ」と言って、たそがれに立って逃げ、その天幕と、馬と、ろばを捨て、陣営をそのままにしておいて、命を全うしようと逃げたからである。 そこでらい病人たちは陣営のほとりに行き、一つの天幕にはいって食い飲みし、そこから金銀、衣服を持ち出してそれを隠し、また来て、他の天幕に入り、そこからも持ち出してそれを隠した。 そして彼らは互に言った、「われわれのしている事はよくない。きょうは良いおとずれのある日であるのに、黙っていて、夜明けまで待つならば、われわれは罰をこうむるであろう。さあ、われわれは行って王の家族に告げよう」。そこで彼らは来て、町の門を守る者を呼んで言った、「わたしたちがスリヤびとの陣営に行って見ると、そこにはだれの姿も見えず、また人声もなく、ただ、馬とろばがつないであり、天幕はそのままでした」。 そこで門を守る者は呼ばわって、それを王の家族のうちに知らせた。 王は夜のうちに起きて、家来たちに言った、「スリヤびとがわれわれに対して図っている事をあなたがたに告げよう。彼らは、われわれの飢えているのを知って、陣営を出て野に隠れ、『イスラエルびとが町を出たら、いけどりにして、町に押し入ろう』と考えているのだ」。
これはそのとおり彼に臨んだ。すなわち民が門で彼を踏みにしたので彼は死んだ。

議論したあと彼らは一緒に起きて行進しました。 倒れればお互いに起こしてくれて慰めて励まして行進しました。 王と民はらい病患者を城の外に残して門を閉めてしまったが彼らは神様がくださった救いの消息を城の中の民が飢えと死を免れるようにするために暗い夜道、荒い野原を帰りました。 クリスチャンは神霊な糧と義の服を見つけてこれを食べる人々です。 私たちはこの美しい消息、恵まれた消息を伝えなければなりません。 皆さんは見つけた美しい消息と恵まれた体験をもっと多い人と分けるために手間を取らなくなるように願います。

夕暮れに起きた四人は 第一、人生に近付く問題によって恨まないで積極的な姿勢に問題解決を模索する信仰の人々でした。 第二、いくら当面した現実が暗くて難しくても希望を持って奇蹟を期待する所望の人々でした。 第三、おとし入れて欺いて取る利己心がなくて他人も幸運を享受するように力をつくして知らせてくれる愛の人でした。 神様はこのような人々と一緒になさいます。 聖徒の皆さんは信仰、所望、愛の人になって起きて進んでください。 そして皆さんを囲む問題がまるで驚いて肝をつぶして逃走したスリヤ軍隊のようにすべて退いてしまって豊富な生を楽しむことを体験してください。

神様が予言者エリサを通じて予言した救いの約束を成就する神様の動き手で使い受けた人々は果して誰ですか? サマリア城中の民ですか? イスラエル王ですか? 王の警護長官ですか? いいえ。 彼らはサマリア城門の入口にあった四人のらい病患者でした。 彼らは城の内人々に忘れた存在でした。 しかし神様は彼らを選んでイスラエルに救いの消息を送る動き手にしました。 神様はどんな理由で城門にいるらい病患者を使ったのですか? そこには理由があります。彼らがこのような極甚な難局に直面して対処する態度で私たちが三種類の理由を捜してみることができます。

第一、彼らは信仰の言葉と行動をしました。

彼らはお互いにこのように言いました。 “私たちがどんな理由でここに座ってたまらないだけ待とうか。” 彼らは一言半句も神様を恨まなかったです。 彼らは城の内にいる人々から冷待と捨てられたが彼らを恨まなかったです。彼らは現在の場合を改善するために何の事でもしなければならない敢然と起きました。 “私たちがスリヤ軍隊がいる陣地に行こう。” と言いながら一緒に起きて行進しました。 信仰の人は難関と危機に直面すれば ‘どのようにすればこの悪条件を踏んで起きようか?’ を思います。 ‘誰のためか’と思うより ‘どのようにすれば’と思います。

人生に近付くさまざまな問題の挑戦に対して積極的な姿勢に応戦します。 現在の場合を改善するために何の事でも始めなくちゃいけないと思って敢然と起きて決断を下して解決策を模索します。

第二、彼らは所望の言葉と行動をしました。

彼らは最悪の状況でも生きることができるという一つの希望を持つのをためらわなかったです。彼らが持った希望はまことにはかないのでした。“われわれがもし町にはいろうといえば、町には食物が尽きているから、われわれはそこで死ぬであろう。しかしここに座していても死ぬのだ。いっその事、われわれはスリヤびとの陣営へ逃げて行こう。もし彼らがわれわれを生かしておいてくれるならば、助かるが、たといわれわれを殺しても死ぬばかりだ」”（列王紀下 7:4） 神様はこのはかない希望に大きい権能を加えてくださったのです。 四人が行進する時に神様は彼らの足音と倒れて起きてお互いに慰める音がスリヤ軍隊には地軸を揺るがす 軍勢に戦車の音、馬の音、大軍の音を聞こえるように摂理してくださったのです。 希望を捨てた人は良い消息を聞いてもこれを否定的に解釈してしまいます。 エリサが驚くほど良い消息を予言する時に王の警護長官はエリサの予言をあざ笑いました。 そして悲劇的な結果にあいました。 皆さんは困境に処しても “私は所望があります。” “神様が一緒になさいます。 神様が手伝ってくれます。” と言ってください。

第三、彼らは愛が一杯な言葉と行動をしました。

愛の人は自分だけ生きると餓鬼争いしないです。サマリア城の内の人々は極度のエゴイストになってお互いに欺瞞して子まで食いました。 らい病患者の四人は一緒に生きるためにお互いに